

## 園の実践事例紹介～「科学する心」を育てる～

### 子どもの思いを見とる～小学校教師との対話の中で～／京都市立楊梅幼稚園（京都府）

園と学校の先生が、子どもの思いに丁寧に向き合い、語り合う実践です。多様な見方を重ねることで、子ども理解がより一層深まります。子どもをまん中に、保育者と教師のまなざしがつながることの大切さが感じられます。

#### 命に寄り添う環境／4歳児

#### サナギポケット（6月9日～10日）

クラスで飼育していた蝶の幼虫がサナギになった。6月、G児とH児が虫かごの蓋にぶら下がっていたサナギが落ちていたことに気づく。サナギは羽化の途中で上半身だけ脱皮していた。G児は、落ちたサナギをティッシュの敷いたプラ容器の上に置こうとするが、自分でつかめない。近くにいた保育者に声を掛けてティッシュの上に乗せてもらった。G児「どうしよう、ちゃんと羽化するかなあ」  
H児や数人も横で見ている。

#### 3つの環境構成による事例の色分け

- ①興味や欲求に応じた環境
- ②発達の時期に即した環境
- ③新しい出会いがある環境

その様子に気づいた担任が、「どうしたの？」と声を掛けた。G児「サナギが落ちてん」H児は横で、「サナギポテト」と言う。保育者は、「サナギが落ちたん？大変！」「サナギポテトって何？」と聞く。しかしH児は、「サナギポテト。サナギポテト」とだけ繰り返す。「死んだらどうしよう」と心配し、悩むG児の様子を見て、保育者が「（サナギが落ちた時の対処法を）図鑑で調べてみる？」と声を掛け、G児と絵本室へ向かった。

チョウの図鑑を見るが、サナギが落ちた時の対処法は載っていなかった。そこでiPadで調べる。

#### 図鑑にのってるかな？



すると、対処法のひとつに“サナギポケットをつくる”と書いてあった。H児が言っていた“サナギポテト”はサナギポケットのことだったのかと、保育者がH児に聞くと「そう！」と言った。保育者「サナギポケット、前から知ってたの？」  
G児「お母さんに教えてもらってん」  
保育者「そうやったんか～」と言いながら、さっそく一緒にサナギポケットを作る。G児とH児が画用紙とテープとハサミでサナギが入る大きさの円錐をつくり、何とかサナギをポケットに入れることができた。「ちゃんと羽化するかなあ」とG児。

誰もが手に取って見られるテラスに虫かごが置いてあったので、保育者は「誰かが触って倒れたり落ちたりしたらあかんし、なんか紙に書いて貼っておく？」と提案した。G児もH児も承して文を考えた。横で様子を見ていたI児が、「“チョウチョになりかけている。まだ羽が生えてきてないから触らないでね。”って書こう！」と提案した。それを聞いたG児も「倒れるかもしれないしな、倒さないでねって書こう」と虫かごに貼った。



紙に書いておこう！

翌日、羽化したチョウは生きていたが羽が広がらず、うまく跳べない。登園時、G児の母親がティッシュに砂糖水を浸したもので栄養をとったらいいかもかもしれないと調べて持ってきてくださった。砂糖水を虫かごに入れて、砂糖水を飲むか見る。しかし、飲む気配はないため、G児と保育者はiPadで調べた。“爪楊枝でチョウのストローを伸ばし、口先を砂糖水のティッシュに当てると飲む”と書いてあったのでやってみたが飲まない。G児が「スプーンですくって飲ませてあげる」と言うので、小さめのプラスチックのスプーンを渡し、砂糖水を少しすくうが飲まない。周りの子どもたちも様子を見に集まりだす。「先生、（ティッシュを）ちょっと切って」と言うのでハサミで小さく切り、それをスプーンに乗せてチョウのストローの先までもっていった。

しかし飲まない。「どうしよう…」と悩むG児と保育者。  
しばらくすると、G児が「元気ないし、外に返してあげたほうがいいかなあ？でも雨降ってるしなあ。どうしよう」と言った。「どうする？」と保育者も一緒に悩んだ。その後も長い時間「どうしよう…どうしよう…」とチョウを見ながら言い続け、その“どうしよう”という思いは、チョウを手放したくないけど手放さないといけないという葛藤の“どうしよう”ではなく、この先どうしていくのがいいのだろう、今の状況からどう進んでいけばいいのかわからないといった思いの“どうしよう”に聞こえた。



小学校教師との対話の中で

## 「子どもと教師が共に創る保育・授業の中に育まれる創造力」

小学校教師

保育者



語彙を獲得していない子どもたちの思いを受け止める難しさがあると思います。幼稚園の先生の言葉以外で見とる力が専門性なのかなと感じました。

言葉だけでは見取れなくても、これまでの関係性の中で、表情や動きなどで、その子どもの思いを探っていきます。G児の「サナギポテト」の意味と、それを繰り返し伝えようとしている。内面が理解できた時は嬉しかったですね。



その子どもの思いを受け止めて、やりたいことに最後まで関わる先生。先生が子どもと一緒に向き合おうとするからこそ主体的な姿につながっているのですね。

子どもの願いが実現できるようにと常に思っていますが、自分の声かけが子どもの主体性を奪うことにつながっていないか、他に違う声かけができたのではないかと反省することがあります。



子どもの思いと教師の思いということに関しては、小学校はこの時間に到達させたい目標があるので、子どもの学びたいことと教師の学ばせたいことのズレが生じてしまいます。子どもの思いにどうしたら近づけられるかが難しいところです。



子どもたちとの対話の中でめあてを決めたり、解決方法を探ったりしていきますよね。

幼稚園でも、子どもと一緒に悩みながら、材料を用意したり、必要なものをつくったりなど環境を再構成していきます。保育と授業を創っていくときに大切にしていることが同じですね。



### ♡ 考察

子どもの思いをどのように見取るか、子どもと保育者の思いのズレをどのように合わせていくか、ということが話題になった。私たち保育者は、課題解決に向かう仲間の一員となって、子どもと対話を繰り返したり、環境の再構成をしたりしながら、互いの思いを合わせていくことを大切にしている。それは幼稚園でも小学校でも同じであった。このように子どもと保育者や教師と一緒に創っていく保育や授業を目指すことが創造力の育成に向かっているのだと感じた。